

患者の負担抑制で受診拡大へ

山下病院、大腸CT検査に力

「内視鏡」より短時間

消化器専門病院の医療法人山下病院（一宮市中町、服部昌志理事長、電話0586・45・4511）は、大腸CT検査に力を入れている。大腸を炭酸ガスで膨らませ、最新の装置で観察する検査方法で、従来の内視鏡検査より短時間で患者の負担も少ないのが特徴。検査実績数は全国1位で、増加する大腸がん患者の早期発見・治療に向けて来院者の対象地域拡大を進めている。

（柴田芳尚）



大腸CT検査は患者の苦痛を軽減するのが特徴



服部昌志理事長

大腸CT検査は、全国に先駆けて2003年5月から開始、最新の技術や設備を導入してきた。現在の検査法は、検査前日に検査用の経口造影剤を使用して大腸内の残さを標識する「タギング法」と言われる前処置を実施。当日に腸の動きを抑える筋肉注射をした後、肛門から炭酸ガスを注

入して膨らませた大腸をCTスキャナーで撮影し3D医用画像処理ワークステーションで画像処理して診断する。検査時間は5〜10分と、通常の内視鏡検査（15〜30分）に比べ短い。また、検査前に服用する下剤も10分の1程度の量で済むなど患者の負担を大幅に軽減できる。

大腸がんは、がん患者の症例では最多。早期発見すれば高い確率で完治できるが、大腸の検査は苦痛を伴うなどのイメージが先行して受診率が低く、受診後の精密検査も受けない人が多いたのが課題となっている。

CTだけではない。大腸や胃の内視鏡検査も同じで、検査当日には診断結果を出し、患者の苦痛を軽減する方針を貫く。その後の治療面でも最新鋭の設備と優れた専門医により、患者の体への負担が少ない低侵襲の内視鏡治療、腹腔鏡手術など、消化器領域に特化した最先端医療で腫瘍の除去などを行う。

こうした体制が評価され、2017年度の検査・治療件数は大腸が約7千件、胃が約9千件。うち大腸CT検査は約2500件で、導入開始から同年度まで2万7800件に達した。

同院では消化器系の検診受診率を高めるため、近隣地域の医療機関と連携を進めている。地元の一宮市や稲沢市以外の医療機関を訪問し、服部理事長ら同院の医師が同院の実績などを説明。18年度は名古屋や尾張全域、岐阜市、羽島市などに対象エリアを広げ、年間で500件の訪問を計画。20年度には大腸で1万件、胃で1万2千件の検査・治療件数を見込む。服部理事長は「消化器領域の拠点病院としてエリアを拡大する。国内最高水準の医療を提供する病院を目指す」と話している。



2018年（平成30年）

7月12日

木曜日